逃げる

FUIR

ジャン=フィリップ・トゥーサン
Jean-Philippe Toussaint
野崎 歓・訳

集英社

逃げる

装丁　米谷耕二

夏

I

マリーとのあいだに、いつか終わりは来るのだろうか？　二人が仲たがいする前の夏、ぼくは数週間、上海で過ごした。マリーに任務らしきものを託されていたとはいえ（それをくわしく説明するつもりはない）、本当のところ仕事のための旅というよりも、むしろただの観光旅行だった。上海に着いた日、マリーのビジネス上の知り合いであるチャン・シャンチーが空港まで迎えにきてくれた。前に一度、パリのマリーのオフィスで会ったことがあるだけだったが、すぐに見分けがついた。彼は入国審査カウンターを出てすぐのところで、制服姿の警官と立ち話をしていた。年のころは四十くらいか、丸い頬、でっぷりと太った顔立ち、すべすべとした赤銅色の肌。真っ黒なサングラスが顔の上半分を覆っている。スーツケースが出てくるのをベルトコンベ

アーの脇で二人で待ったが、到着早々、下手な英語で一言、二言ことばを交わすとすぐに、彼はぼくに携帯電話を差し出した。プレゼント・フォー・ユー、といわれて、なんとも困惑してしまった。ぼくに至急、携帯電話を持たせる必要などどこにあるのかよくわからない。しかも中古の、見栄えのしないくすんだグレーの携帯電話で、包装も使用説明書もなしである。こちらの居どころをいつでも押さえておくためか、移動を監視し、目を離さずにいようというのか？　わからない。空港内の通路をチャンに従って黙々と進みながら、漠然とした不安を覚えた。その不安は旅の疲れと、知らない都市にやってきた緊張によっていっそう強まった。

空港のガラス張り自動ドアを出ると、チャン・シャンチーは黙ったままさっと片手を挙げて合図し、すると真新しいグレーのメルセデス・ベンツがゆっくりとやってきてぼくらの前で停まった。彼は運転手と交替して運転席に乗り込み、運転手のほうはいるのかいないのかわからないくらい存在感の薄い若者だったが、スーツケースをトランクに入れてから後部座席に座った。チャン・シャンチーは運転席からぼくに向か

って、車に乗るよう促し、ぼくは彼の隣、いかにも新車らしい匂いのする、クリーム色の肘掛けつき革張りシートにおさまった。彼はデジタル式スイッチをいじってエアコンディショナーを調節し、機械の作動する穏やかな音が車内に流れた。マリーから預かってきたクラフト紙の封筒を彼に渡した（中には現金で二万五千ドル入っている）。チャン・シャンチーは封筒を開け、札束の縁にそって親指をすべらせてすばやく金額を確かめ、ふたたび封筒を閉じると、ズボンの後ろポケットに突っ込んだ。チャン・シャンチーは安全ベルトを締め、車はゆっくりと空港を離れて、上海市内へ向かう高速道路に入った。ぼくらは何もいわずにいた。彼はフランス語を話せず、英語も非常に下手である。袖のうんと短い灰色の半袖シャツを着て、首に金のチェーンをかけ、龍の爪のようなデザインのペンダントをぶらさげている。ぼくは彼にもらった携帯電話を膝にのせたまま持てあまし、なぜこんなものをくれたのだろうといぶかった（単に、訪中歓迎の贈り物？）。チャン・シャンチーが数年来、中国でマリーのために不動産取引を行っていることは知らないではなかった。それもどうやら、賃貸契約の又貸しや転売、再開発地区内の建設可能地の買い取りといった、疑わしい、非合

法すれすれの取引で、一切は贈収賄やら袖の下やらにまみれたものらしかった。韓国や日本で最初に成功を収めてから、マリーは香港、北京に進出したばかりか、上海や中国南部にも新しい店を持ちたがっていて、深圳や広東に支店を開く計画もすでに本決まりになっていた。しかしこれまでのところぼくは、このチャン・シャンチーなる人物が組織犯罪に係わっているとは聞かされていなかった。

部屋を予約してもらってあったハンセン・ホテルに到着すると、チャン・シャンチーはメルセデスを敷地内の中庭に停めて、スーツケースをトランクから出し、フロントまでぼくを案内した。部屋の予約のために彼が労をとってくれたわけではいささかもなく、予約はパリの旅行代理店から入れたものだったが（一週間のエスケープ・プラン、旅費とホテル代込み、それにぼくは観光のため、旅程をさらに一週間延長してもらった）、彼は万端を取り仕切ってぼくには口を出させなかった。ぼくを離れたソファに座らせておいて、チェックインの手続きをしに一人でフロントに向かった。ぼくは入口脇、プランターでぐったりと埃をかぶった観葉植物が一列に並ぶ、ぱっとし

ない眺めの傍らでチャン・シャンチーを待ち、彼がぼくの滞在カードに記入しているのを疲れた目で見ていた。すると彼がそそくさと、物思わしげな表情でこちらにやってきて、手を突き出し、パスポートを要求した。またフロントに戻り、ぼくは不安にとらわれながら自分のパスポートの行方を目で追い、他人の手から手へと渡っていくのを眺めるうち、街頭賭博のカードみたいに、それがカウンターの向こうであわただしく立ち働いている従業員たちの手のあいだで不意に消えてしまうのではないかとびくびくした。さらにしばらく待たされてから、ようやくチャン・シャンチーが部屋のマグネットカードをもって戻ってきた。カードは赤と白の厚紙製ケースに収められ、何やら達筆らしい漢字がケースを飾っている。しかし彼はそのカードを渡してくれず、自分で手に持ったままだった。ぼくのスーツケースをつかむと、ついてくるよう促し、部屋に上がるため、エレベーターのほうに進み出した。

三ツ星の清潔で閑静なホテルで、だれともすれ違わず、人影のない廊下をチャン・シャンチーのあとから延々と進んでいくと、掃除用のワゴンが一台、放り出されたま

ま行く手をふさいでいた。チャン・シャンチーがマグネットカードを扉に差し込み、室内に入ってみると中は真っ暗で、カーテンが閉めてあった。入口のところで明かりをつけようとしたが、スイッチをひねっても明かりがつかない。チャン・シャンチーはぼくに、マグネットカードを入口脇の壁に取りつけられた小さな受け口に差し込むよう指示した。そこにカードを入れると電源がオンになる。彼は自分でやってみせ、カードをゆるゆるとすべらせていくと、そのとたんワードローブやトイレに至るまで、部屋中すべての明かりがつき、浴室の換気扇がまわり出し、部屋の空調が騒がしい音を立てて動き始めた。チャン・シャンチーはカーテンを開けにいき、しばし窓辺に留まって、何事か考え込みながら、中庭に駐車してある新品のメルセデス・ベンツを見下ろしていた。やがてこちらを振り返った。もう行くのだろうと思ったが、そうではなかった。肱掛け椅子に腰を下ろして足を組み、ポケットから自分の携帯電話を取り出すと、ぼくのことなどまったく気にしない様子で（ぼくは部屋のなかで突っ立ったままで、旅の疲れもあり、さっさとシャワーを浴びてベッドに横になりたかった）、青いテレフォンカードを膝にのせて、そこに記された指示どおりに何やら番号を押し

ていた。テレフォンカードにはＩＰと書いてあり、それに続けて漢字とコード番号が並んでいる。一、二度やり直してからようやくうまくいったらしく、こちらに向かって大げさに手を振って呼び、ぼくが駆け寄ると、大急ぎで携帯を手渡した。何といえばいいのか、そもそも携帯のどこに向かって話せばいいのかわからず、相手はだれなのか、何語で話すべきなのかもわからなかったが、そのとき女性の声がして、もしもし（アロー）、とどうやらフランス語でいっているらしかった。アロー、ともう一度聞こえてきた。ぼくもやっと、アローといった。相手ももう一度、アロー。どこのだれなのだか、いよいよわからない（いいかげん気分が悪くなってきた）。マリー？　チャン・シャンチーはまなざしも鋭くぼくを見上げて、話をしなさい、相手はマリーですよと促し――マリー、マリー、と彼は携帯を指差してくりかえした――、そこでようやく、彼がパリにいるマリーのところに電話をかけたのだとわかった（つまり彼が唯一知っている、マリーのオフィスの番号に）。電話に出た相手は、オートクチュールのブランドである〈アロンジ・アロンゾ〉の女性秘書だった。しかしぼくには、いまマリーと話をする気など全然なかったし、目の前にチャン・シャンチーがいるのでは

なおさらだった。いよいよ気分の悪さを抑えがたく、電話を切ってしまいたかったが、交信を終えるにはどのボタンを押せばいいのかもわからないので、ぼくは携帯を、強烈な熱を放っていて手に持っていられないかのように、あたふたとチャン・シャンチーに手渡してしまった。彼は乾いた音を立てて携帯を折りたたみ、思案顔をした。膝にのせていたテレフォンカードを手に取り、埃でも落とそうとするようにカードで手の甲をとんとんと叩き、肱掛け椅子に座ったままこちらに腕を伸ばしてそれを手渡した。フォー・ユー、といってから、英語で説明していわく、電話をかけたいときには必ずこのカードを使わなければならない、番号はまず１７９１０、それから２を押すと、英語の説明が聞こえてくるので（もし北京語がよければ１を押すべし）、そこでカードの番号を押し、コード番号（ＰＩＮ）４４４７も押して、そこから相手の番号だが、国外通話にはまず００、そしてフランスにかけるには３３を押す、云々。アンダースタンド？　まあ、大体のところは、とぼくは答えた（原則はともかく、細かいところまでわかったとはいえない）。電話したいときには必ず――いつだって、と彼――このカードを使わなければならない。彼はナイトテーブルの上にのっているホテ

ルの旧式な固定式電話を指さして、だめだめ、とこちらに向けて力強く手を振って見せた。まるでそれが命令であるかのように。ノー、と彼はいった。アンダースタンド？　ノー。ネヴァー。ヴェリー・エクスペンシヴ、と念を押す。ヴェリー・ヴェリー・エクスペンシヴ。

それから数日のあいだ、チャン・シャンチーは、ぼくにくれた携帯にせいぜい一、二度電話を入れて様子を聞き、昼食に誘う程度に留めていた。上海に到着後、ぼくは毎日ほとんど単独行動をとったが、大してすることはないし、知り合いもいなかった。町を散策し、食事は行き当たりばったり、街角で香辛料のきいたレバーの串焼きを食べたり、満員の安食堂であつあつの麺をすすったり、ときには大きなホテルのレストランに入って、キッチュな装飾のほどこされた人けのない店内で長々とメニューを検討して、もっと手の込んだコース料理を食べることもあった。午後は自室で昼寝、暗くなったころになってようやくまた外に出てみると、さすがにいくらか涼しくなっているようだった。生暖かい夜気の中を歩き、物思いにふけりながら南京路（ナンジンルー）を上り、色

とりどりのネオンの輝く店々のにぎわいには心を惹かれなかった。知らず知らず河に招き寄せられるらしく、いつでも結局は外灘（バンド）に出、潮風と波しぶきに迎えられるのだった。地下道を横断し、立ち並ぶ古い欧風建築を眺めながら河沿いにゆっくりと歩く。建物の屋根を照らす照明が、夜の闇に緑の光輪を投げかけ、そのエメラルド色の光が弱々しく黄浦江（ホワンプージャン）の水面に震えていた。水面には野菜の屑や泥、水草が浮かんでいて、暗闇に淀み、大きな波の動きに合わせて揺れているのだが、その向こうの対岸では、浦東（プードン）新区に高層ビルが林立して曲線を描き出し、まるで手相を読むように、未来派風の線を天空に読み取ることができた。特徴的な球体で見分けられるのが東方明珠塔（ドンファンミンジューター）、その右手、遠慮がちに一歩下がってさほどライトアップもされていないながら、慎み深く威厳をたたえて建つのが金茂大厦（ジンマオダーシャー）。欄干にもたれて、闇を流れる河の黒く波打つ水面を眺めながら思案にふけり、心わびしくマリーのことを思った。そうしたわびしさというのは、恋の物思いが闇の中の黒い流れの光景と結びついたときにこそ、胸の内に湧いてくるものなのである。

マリーとの仲は、そもそも希望のないものだったのだろうか？　しかしあのころ、ぼくにいったい何がわかっただろう？

この旅行中に北京に行く予定はなかったのだが、偶然のなりゆきから北京に数日滞在することになった。ある晩、チャン・シャンチーが電話してきて、展覧会のこけら落としに一緒に行かないかと唐突に誘った。会場は郊外にある、大きな倉庫を改造した現代美術のギャラリーで、モビール式ビデオ作品が展示されていた。ギャラリーの暗がりに金属の棒がゆっくりと揺れ、その先にプロジェクターが固定されて宙に浮かんでいる。複数のプロジェクターの投影する映像が壁に広がり出し、互いにくっついては離れ、くっついては離れしていた。その会場でリー・チーと知り合ったのである。会場にぽつんと一人、壁に背中をくっつけて、コンクリートの床の上に座っている、長い黒髪にクリーム色の革の上着を着た女性がいた。その姿はすぐに目に入ったが、言葉をかけたのはしばらくたってから、オーストラリア産ワインや中国産ビールの瓶が雑然と並ぶ、立食テーブルの傍らでだった。テーブルには展覧会のチラシやカタロ

グも積んであった。彼女はぼくが中国人でないことを見破った（慧眼ぶりに喜んだぼくは、どうしてそう思ったんですか？　と尋ねた）。あなたの微笑みのせいで、と彼女は答えた。あなたのそのかすかな微笑み（こうしたやりとりはすべて英語で行われ、その間ぼくらの口元には、二人が言葉を交わして以来抑えようもなく浮かんでくるかすかな微笑みが絶えることがなく、ちょっとしたことで広がるその微笑みは、何やらこのうえなく穏やかに効く燃料を糧として、延々と保たれているらしかった）。ぼくらは青島（チンタオ）ビール二本を持ってギャラリー脇の空地に出、ベンチに腰を下ろした。空瓶は四本、六本と増えていき、夜はゆっくりと深まり、一緒に過ごすぼくらの姿は、ギャラリーのモビール式ビデオ・プロジェクターがゆらゆらと投げかける緑や赤の透明な光にときおり照らし出され、まさに中国式影絵芝居の情景という趣である。ギャラリー内で音響装置をテストしているかと思ったら、メタル・ロックの轟音が夏の夕べの穏やかな空気を突如としてつんざき、窓ガラスを震わせ、生暖かい闇の中でバッタを飛び跳ねさせた。ベンチの上では互いの言葉が聞こえなくなり、ぼくは彼女に体を近寄せて、音楽に負けじと声を張り上げるかわりに、唇に彼女の髪が触れるくらい、

耳元まで口を近づけて、小声のまま話し続け、彼女の肌の香りをかぎ、ほとんど肌と唇が触れあうかと思えるくらいで、それでも彼女は気に留める風もなく、じっとしたまま、ぼくの体を避けようとするそぶりを見せずにいて――話を聞きながら彼女の瞳は闇の中で遠くを見つめていた――、二人のあいだにやさしい感情が生まれようとしていることがぼくにはわかった。彼女がいうには、明日仕事で北京に行かなければならないのだけれど、あなたも一緒に来ることにしたらどうだろう、ほんの一、二泊の旅だし、あなたは一泊してすぐに上海に戻ったっていい、夜行列車は快適で、料金も高くない――それにどちらにしろ、あなたには上海で別に用事もないはず。でしょ？ぼくは迷ったが、とはいえじきに決心はつき、彼女に微笑みかけ、彼女の目をじっと見つめながら、いったいこの提案は本当のところ何を意味しているのだろう、その裏にはひょっとしたら、恋のたくらみが潜んでいるのではないかと考えて、はやくも甘美な思いに誘われたのである。

翌日、夕刻にホテルを出た。荷物は置いていき、洗面道具を入れたデイパック一つ

だけ、もらいはしたがだれからもかかってこない携帯電話もいちおう持って出た（そもそも携帯の番号を知っているのはチャン・シャンチーとマリーだけだ）。少し時間があったので、タクシーに乗らずにバスで駅まで行き、途中、上海の街が夕日を浴びてオレンジ色に暮れていくのを窓越しに眺めた。

リー・チーとは上海駅の前で待ち合わせていたが、それは中国で待ち合わせようというにも等しいことだった。駅前広場では何千もの人たちが押しあいへしあいして、地下鉄の入口やバス乗り場に向かい、煌々と輝く駅のガラス張りの建物を出たり入ったりし、建物の外では駅のガラスに沿って何百人もの乗客が暗がりの中、地面にぎっしりと並んで何をするともなく腰を下ろし、到着したての、あるいはこれから夜行列車に乗るそれら農民や季節労働者たちは足もとに山ほど荷物を置き、使い古した鞄や、口のよく閉まっていない袋、紐のほどけかけた荷物、蓋のあいた木箱や段ボール箱、ぺちゃんこの南京袋、小包、道具類一式、さらにはただのシーツをぞんざいに縛った中から、コンロや鍋が顔をのぞかせていた。暑苦しい空気の中で汚れた服が臭いを放

つのを感じつつ、リー・チーを目で探していたぼくは、まわりの人々がこちらを盗み見たり、こそこそとささやいたりしているのに気がついた。年老いた物乞いの女がぼくにくっついたまま動かず、木でできた大ぶりの松葉杖を脇にはさみ、じっと目を据え、背をかがめて手を突き出したまま、まなざしになんともいえない哀しみを湛えていた。リー・チーは現れないのではないかと思い始めた――何もかも、あまりに急なことだった、昨日はまだ知りあってもいなかったのだ――そのとき、遠くからこちらに向かって群衆をかきわけて進んでくるリー・チーの姿を認めた。最後は小走りでやってくると、息を切らしながら微笑みを浮かべてぼくの腕を取った。カーキの上着、ひらひらと軽い、上着というよりもシャツといったほうがいいような上着をはおって、その下に黒のビュスチエをのぞかせ、襟元の肌の上にはごく小さな翡翠が輝いていた。ところがそれとほぼ同時に、いわば彼女の航跡に従うようにして、数メートル後ろからチャン・シャンチーが、暗がりの中、黒眼鏡をかけてゆっくりと進んできたのである。これはどうしたことか、理解できないままぼくはにわかに不安に襲われ、不快さと疑念が込みあげてくるのを覚えた。チャン・シャンチーは再会のあいさつがわりに、

ぼくの目には皮肉に映る、さらには冷笑が混じっているとも思えるような微笑を浮かべてみせ、まんまと一杯食わせてやったというつもりなのか――それとも、あんたは出し抜いたつもりだろうが、ちゃんとお見通しだったのさといいたいのか――、何歩か遠ざかったかと思うと、今度は携帯でどこかに電話を入れている。いったい何をしているんだ？　単にリー・チーを駅まで送りにきただけなのか？　なるほど、リー・チーとチャン・シャンチーが知りあいだったとしても何も驚くことはない（そもそもぼくがリー・チーと知りあったのはチャン・シャンチーに紹介されたからなのだった）、とはいえぼくらの旅行のことをチャン・シャンチーはいったいどうやって知ったのか――、そしてぼくの当惑は、彼も一緒に北京まで行くのだとリー・チーに知らされたとき、いっそう深まったのである。

　われわれは駅の建物を後にして駆け出し（何がどうなっているのか理解しようとするのはもうやめた、中国に着いて以来、わけのわからないことがあまりに多すぎる）、車のヘッドライトの白い光に目を眩まされながら大通りを走って渡り、駆け込んだ先